

(海外) 出張報告書 (学生用)

2014 年 7 月 25 日提出

氏名	宮本 亮
所属	大学院獣医学研究科 薬理学教室
学年	博士課程 4 年
出張先	Cape Town International Convention Center (南アフリカ・ケープタウン)
出張期間	2014 年 7 月 12 日～7 月 19 日
目的	17th World Congress of Basic & Clinical Pharmacology (WCP 2014) でのポスター発表のため

活動内容 (2,000 字程度、活動内容が判る様な写真や図表を加えて下さい)

7 月 13 日から 18 日までの計 6 日間、南アフリカ共和国の南端に位置するケープタウンに滞在し、17th World Congress of Basic & Clinical Pharmacology (WCP 2014、国際薬理学会) において自身のポスター発表と他の研究者の発表聴講を行いました (12 日出発、19 日帰国)。南アフリカ全体の治安は決して良いものとは言えませんが、今回訪れたケープタウン、特に学会会場と



図 1 学会会場の CTICC

なった CTICC (Cape Town International Convention Center) 周辺の治安は非常に良い状態に保たれており、食べ物などはウォータフロントと呼ばれる近くのショッピング街でそろえることができます。国際薬理学会は 4 年に一度開かれる、薬理学のオリンピックのようなもので、世界各国から様々な分野の研究者が参加します。オープニングの Keynote Speaker として、G タンパク質共役型受容体の研究で 2012 年のノーベル化学賞を受賞した Robert Lefkowitz 氏が招かれるなど、各分野における著名人が一同に会す学会でもあります。今回は 5 日間を通してシンポジウム形式の口頭発表がおよそ 300 演題、ポスター発表が 1000 演題と、規模としてもかなり大きなものとなりました。また開催国である南アフリカ共和国からの演題も多く見受けられました。当国からの演題は植



図 2 会場内での発表の様子

物や毒、寄生虫等を扱ったものが多く、研究にもその国の事情が反映されていることを感じました。

ポスター発表では1時間半のコアタイムが設けられました。私の発表時には、喜ばしいことに私が3年前に書いた硫化水素（ H_2S ）に関する論文を自身の研究室のセミナーで紹介し、さらに論文内でも引用したという、ハンガリーの Erika Pinter 博士とお会いすることができました。互いの研究に対するディスカッションは非常に楽しく、気づけば30分以上も立ち話をしていました。「あなたの論文を参考にこのデータをとったのだ。」「あなたたちと私たちが主眼を置いている場所は少し違う。しかしそこにうまく橋渡しができれば互いにとって有益だと思うし、いいコラボレーションになると思う。」「私たちの大学では *in vivo* での実験が可能な機械が整っているから、力になれるなら協力したい。」といったありがたい言葉も頂き、その言葉は、これまでの私の研究に少なからぬ価値を見出すとともに、これからも意味のある研究をしていきたいという強い意志を抱くに十分なものでした。

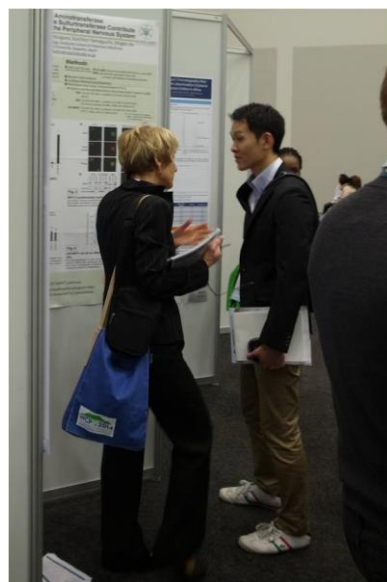


図3 ポスター発表でディスカッションする筆者

また学会では分野ごとに口頭発表のセッションが設けられており、ここでも感慨を受けることがありました。私が卒業研究時から興味を持っている、痛み受容体 TRPA1 を扱ったセッションでは、「Nature」や「Cell」といった一流誌でよくその名前を見る3名の研究者（Felix Viana 博士、Pierangelo Geppetti 博士、Stuart Bevan 博士）の発表を聴くことができました。彼らはその分野で著名であるにもかかわらず、基本的な挨拶から非常に丁寧であり、どこか庶民的で、聴講する側が入り込み易い雰囲気醸し出していました。さらに発表も無駄がなく極めてシンプルなものでした。全体として決して多くを詰め込みすぎず、一つのスライドには図を少なく、さらに図の下に簡単な結果を記述しておくという配慮が見てとれました。また話し方は丁寧で、そのスピードも早すぎず、遅すぎず、時に抑揚がつけられていました。私がこの分野に通じていたということはありませんが、その発表はとても分かりやすいものでした。私も日ごろからできる限り無駄をなくし、分かりやすいプレゼンテーションをするように心がけていますが、今回聴講した発表は今後のプレゼンテーションの指針となるものであらうと感じています。しかし、常に落ち着き、質問にも堂々と答えるあの姿勢は、自身の分野について確固とした知識を持ち、数をこなしていかなければ得られないとも思えました。今後いっそう自身の研究に対して地道に取り組むことはもちろん、積極的にその成果をアウトプットしていくことが必要であると感じました。

余談にはなりますが、学会の空き時間に南アフリカ大陸南西端の喜望峰（Cape of Good Hope）に足を運ぶことができました。ここは1488年にバルトロメウ・ディアスが発見し、1498年にバスコ・ダ・ガマがインド航路発見のために中継点として利用した場所です。ここは以前「嵐の岬」と呼ばれ、当時の航海は困難なものであったそうです。歴史的航海に敵わないまでも、強い開拓心と、粘り強い継続心を、自身の研究でも持ち続けていたいと感じました。



図4 学会の合間に訪れた喜望峰

今回の学会参加は恥ずかしながら私にとっては初の海外渡航でしたが、長時間の移動や宿泊をはじめ現地の人との会話など、あらゆるものがとても新鮮でした。学会に参加したことで今後の研究に対する意欲がわき、同時にこういった研究者になりたいという指針も持つことができました。また語学力の必要性についても強く感じました。英語を話せなければ普段のコミュニケーションがスムーズにいかないだけでなく、自身の研究内容と、自分はこういう考えをもった研究者なのだというのを正しく伝えることができないと感じました。

最後になりましたが、今回の海外出張は全面的にリーディングプログラムの支援により可能となりました。貴重な経験をさせていただいたことをここに記するとともに、関係者の方々に改めてお礼申し上げます。

指導教員確認欄	所属・職・氏名： 大学院獣医学研究科薬理学教室・准教授 乙黒兼一 印
---------	---

※1 電子媒体を e-mail で国際連携推進室・リーディング大学院担当に提出するとともに、指導教員が押印した原本を国際連携推進室・リーディング大学院担当に提出して下さい。

提出先：国際連携推進室・リーディング大学院担当

内線：9545 e-mail: leading@vetmed.hokudai.ac.jp